

2004年10月1日、毎日新聞に『翌年GM大豆栽培計画』の記事が載り、そこそこの騒ぎになった。

いまだもってなぜ騒ぎになったのか理解はできていない。取材に来たテレビや新聞、雑誌のすべての記者は「GMの賛成派、反対派の両方の意見を聞きます」と言う。おーありがたや、ありがたや。しかし、話は聞くが、発表される内容は私の意にそぐわない記事ばかりだ。

ある雑誌のエロ記者は「我われの雑誌は銀行などの金融機関でよく読まれているので安心してください」と言う。御姿の画像が欲しいと言われ、いろいろとポーズを取った。一枚目を撮る時に強風が吹き、髪やジャケットが乱れた。記者が「もう一枚取りましょう」と言うので、髪と服を整え、にっこりポーズをした。

取材が終わると、そのエロ記者はスキノに行くと言う。「前に来たときはあの店が良かった。でも今度は新しい店を開拓したい」とノタマウ。なんでも池袋で酷い経験をしたそうで、それに引き換えスキノは安全・安心らしい。頭と下半身は別人格の典型なのだろう。その後スッキリとスキノの射セイ産業に貢献したことだろう。

一カ月が過ぎたころ、その雑誌が送られてきた。どのような記事

になっているのかワクワクしてページを進むと、真ん中あたりに私の画像付きの記事があった。おいおいなんだよ、この画像は。髪は乱れ、ジャケットの下からシャツがはみ出て、目は細目で下向き加減だ……。どう考えても豊かさは見つかからない。初めて見る人は「なんだこの貧相なオヤジは」となる。どう考えてもあのエロ記者は、その瞬間を狙ってシャッターを切ったのだろう。

次のページを覗いてみた。な、なんとそこには、東京の調布飛行場の飛行機仲間が自身の機体の前に立ち、満面の笑顔で写っている。なんだよー、この差は。あれから15年が過ぎた。あの調布の飛行機仲間は組み替え（組み換えではない）され、半分が入れ替わった。以前は不動産関係者が多かったが、今はIT関係者が多い。そうになると、あの時に満面の笑みだった人はどうなったものか。とりあえず私は農水の絶対的農政と〇〇系金融機関のおかげで規模拡大を続けながら生き残っている。

GM作物の恩恵を受けているのは誰か？

Vol.140



当初は誰からも注目されなかった

毎秋、東京で農業関係の勉強会が開催される。もちろん北海道でもそのような勉強会はあるが、自民党支持の共産党系の訳のわからない、いや理論武装のみで農産物の増産に興味を持たない思想は危険なので、金髪・ブルーアイがたくさんいる首都の東京に行くことにしている。毎年11月には

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作物ける。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョシディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

アメリカの大豆生産者と関連の組織が集まり、今年のアメ리카の出来具合はどうかのこうだと4時間くらいかけて報告会を行なう。生の生産者の話を聞けるのだから国内の小作人根性たつぷりの一見マトモそうな大豆生産者は面白くないだろうね。

10年ほど前の報告会ではアメリカ大豆協会の理事が「大豆の価格は来年50%上がり、その後さらに50%上がり、そのままの価格で20年まで続きます。収量は毎年何%上がり……」と言った。マジか? そんな未来日記を言っているのか? と思っただが、3日後に日経新聞に同じことがアメリカ農務省発として記事になった。このBクイック(時差)が正しいのであれば、アメリカでは生産者団体が農務省との情報交換や価格操作を容認していることになる。

日本では……無駄な詮索だった。この報告会には95年ころから参加している。ちょうどそのころにGM大豆の話が出て、翌年くらいから日本に輸出されるようになったが、当時の会場では誰からも注目は浴びなかった。誰からも「というのは日本の農林水産省、輸入業者、飼料会社、搾油会社、畜産関係者、バイオ関係者、食品加工会社など、名前を聞けばそうそうたる会社が何の疑問もアメリカ人につづけないのに、北

海道の一大豆生産者がGMの技術や安全性に疑問に感じる必要があるのだろうか?

GMの時のような失敗はもうしない?!

だが、「日本を代表するお歴々が文句を言わないのだから、私が作っても良いでしょ?」と考えたのが間違いだ。こいつらは南文化の代表であり、沈黙は金なりを地で行き、富を分散することに興味を持たない極東アジア人でしかなかったのだ。

18年にもアメリカ大豆生産者の報告会があり、30分程度のゲノム編集について説明があり、19年以降、普通に販売されると発表された。発言者は「地球温暖化で将来農作物に影響があり大変です」とか、そのゲノム編集の説明のなかで「今回はGMの時のような失敗はしません。消費者に受け入れられるゲノム編集農作物を進めます」と意気揚々と発言した。その後、会場から意見を求められたので、思いつき「はい!」と手を挙げた。

私は「今年のアメ리카独立記念日(7月4日)の長沼の最高気温は14度で寒かったのでヒーターを使いました。ファーレンハイトのFではなくセルシアスのCですからやはり温暖化は進んでいるんですかね?」と、

とぼけて見せると、会場にいたアメリカ人が10人くらい私を見た。

もちろんゲノム編集についても「では、消費者に受け入れられないゲノム編集作物はどのような物があるのですか?」と聞いてみた。200人を超える会場は

シーンとなり、発言者も10秒くらいフリーズしてしまった。私は「当然だろう」と思った。発言者は重い口をやつと開き、「申し訳ありません、説明が足りませんでした」となった。

つまり、GMの時は特定除草剤耐性やコーンボアなどの様に生産者サイド寄りの農作物ばかりだったが、ゲノム編集では消費者サイドに寄った機能性を持たせた農作物を作りたい、のだ。はっつ? お前の人生は何だったのか? 恥ずかしくもなく間違いをマトモそうに話すこの方は、バイオの会社を渡り歩き、今ではその役に立たない知識を……。

皆さん、よーく考えてみましょうね。世の中に出回っているGM作物はアメリカの生産者だけに利益のあるものなのでしょうか。日本の年間輸入量はGMコーンが1500万トン、GM大豆が300万トン、そのほかにもナタネや綿なども合わせて2000万トンを超える。ざっくりコメの3倍近いものを輸入して加

工、販売しているのは北朝鮮人か? カンボジア人か? コートジボワール人か? 答えは極東アジアの日本人の消費者が直接、間接的に食べているんでしょう? GM作物はなくなり、美味しいノンGM農作物だけが生き残る? バカか。

では聞きたい。なぜ、コシヒカリと並ぶ美味しいササニシキの生産量は最盛期の1/100いや1/1000になったのだ? それは93年の大冷害で収量が激減して、生産者は愛想をつかしたというのが本音だ。北海道にはチホクという種類に最適な秋小麦の品種があった。そんな、良い小麦を空知で作るバカ農家はない。理由は雨で穂発芽になりやすく品質が安定しないからだ。同じく春小麦でパン適性が良いとされるハルユタカ。こちらも同じく穂発芽に弱く、収量性が良くないのでほとんど栽培されなくなった。大豆も病気に弱い、とよ……何とかという品種を長沼で作る生産者はいない。

つまりどんなに消費者に人気があっても、生産者が作らない農産物はスーパーで販売されることにはならない。よってGM作物は生産者と消費者にもメリットがあるのだ。これからもそんなこともわからない小作人根性をぶっ壊す!